

信仰のひと、吉岡美國

井 上 琢 智

第二代院長吉岡美國先生は、若ランパス先生が関西学院の「産みの親」だとすれば、「育ての親」といえます。「無味乾燥で命の輝きのない抜け殻のような仏教」に落胆し、「西洋文明ヲ導入スル」ためには「基督教ニ寄ラネバナラス」と思われた先生は、老ランパス先生を「基督教ノ権化ナリ」と感じ、受洗されました。この出会いこそ、蒔かれた小さな一粒の種でした。

吉岡先生が院長に就任された 1892 年前後は、明治憲法、教育勅語発布、内村鑑三の不敬事件、井上哲次郎『教育ト宗教ノ衝突』出版など、キリスト教には厳しい時代でした。それから 25 年、原田の森校地の拡充、関西学院神学校の専門学校認可、メソヂスト三派合同、カナダ・メソヂスト教会の経営参加、社団の設立など、発展する一方、文部省訓令第 12 号、認定・指定問題に加えて、三派合同や中学部設立がもたらした諸問題に先生の苦悩は続きました。それらはキリスト教主義学校関西学院の存続を脅かすものだったからでした。そのいずれのときにも先生の頭にあったのは「特典便宜何者ぞ。全生徒を失ふとも亦止むを得ざるなり」との想いでした。この想いを支えたのが先生の信仰でした。

中村正直訓『天道溯原』などのキリスト教研究から信仰への道は、権化老ランパスとの出会いや大分りバイバルでの靈的出会でした。留学中に出会った尹致昊^{ユンチホ}に、先生は日米のメソヂストが仏教と同様「ドグマ化し、化石化し、生気がない」と批判し、「必要であれば、自分の利益を犠牲にし、ただ純粹にキリストのために宣教活動するものこそ、真に神に召される」と語っています。これこそ先生の信仰の原点でした。先生は「天」を「天地」と捉え、「父上」である「神」と区別して、「敬う」対象を「天」でなく「神」に求め「敬神愛人」を揮毫しました。さらに「有ゆる人間の中でイエスは」と語られるとき、イエスは人間であると捉えながらも「円満完全にして欠陥なき性格」をもつゆえに「神」でした。ユニテリアン中村とは異なり、先生にとって、イエスはキリスト教信仰上不可欠な存在であり、その「完全」なイエスを目指して努力し続けることこそキリスト者であり、人間として理想的な生き方でした。そのような人間に育つように見守ることこそ、先生にとって関西学院教育の原点でした。

(前関西学院大学学長)